

言語活動の充実を図る 言語技術を使った 授業展開の研究

高知県 言語技術教育研究会

代表 梶原 和美

本研究会の活動の目的は、次の3点である。

- ① 「言語活動の充実」を図る「言語技術」を使った授業展開の研究と実践。
- ② 高知県東部地域における教員の研修の場を作る。
- ③ 「言語技術」を身につけた人材の育成を行う。

本年度開催した研修会は、「ことばの力と言語活動」に焦点をあてた。

高知新聞社やNIEホットらいんととの連携研修会や

先進的な取り組みをされている広島県の先生方から

「言語技術を使った授業展開」について学ぶことができた。

参加した先生方が、ことばの力を育む具体的な授業づくりについて考え、

互いに学び、互いを高め合う研修となった。

1. 研究会のテーマ

子どもたちのメディア漬けが進む今日、自分の思いや考え、状況をことばで他者に伝えたり、話し合ったりすることが稚拙な子どもたちが増えている。

このような状況の中、子どもたちのことばの力はいったいどこで育つのだろうか。

また、グローバル化の進展など急速に社会が変化する中で、次代を担う子どもたちには幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しながら異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている。

そのようなことから、子どもたちに「ことば」を使って立ち向かっていく力を付けてやらなければならないと考えている。

三森ゆりか氏の言語技術教育の目的は、大きく次の2点である。

- ① 実社会で自立していくために有効なことばの力を身につけさせる。
- ② 全ての児童生徒に必要な最低限のことばの運用能力を身につけさせる。

そのための指導の柱は、3点である。

- ㊦ 表現の方法を技術として指導する。
- ㊧ 理解の方法を技術として指導する。
- ㊨ 考えるための方法を技術として指導する。

三森ゆりか氏指導のもと、「ことばの教育」に早くから取り組んでいる広島県は、平成17年度より「ことばの教育」の中に言語技術を取り入れている。言語技術を習得することにより、下記のような、学校だ

けでなく実社会でも活用できる「ことばの力」の育成を目指している。

- ① 情報を主体的に獲得する
- ② 自分の考えを組み立てる
- ③ 分かりやすく発信する力を身に付ける。

また、学習指導要領においても下記のように示されている。

知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である。

(学習指導要領解説総則編)

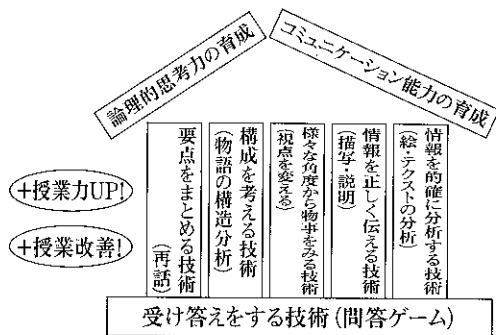
そのため、国語科で、話す・聞く、読む、書く等の基本的な力の育成を図るとともに、各教科においても、記録、説明、論述、討論等の言語活動を充実することが重視されている。本研究会では、今、求められている力の基盤に言語技術を位置づけることはとても重要なことだと考える。

言語技術の指導は、教科等の学習に必要な「聞く」「読む」「話す」「書く」の基礎を身に付けさせるものであり、さらに言語技術を活用することによって、子どもたちが理由や根拠を明確にして受け答えをしたり、多面的な見方をしたりするなど、言語活動を支える基盤になるものと考えられる。

2. 言語技術で育てたい力

図でも示しているように、6つの言語技術のトレーニングによって、2つの力を育てることを目的としている。

1つ目は、論理的思考力の育成である。



根拠を明確にしながらかえる、筋道を立てて考えること、情報をもとに自分の考えを整理することなどのトレーニングを通して、論理的思考力の育成ができると思う。

2つ目は、コミュニケーション能力の育成である。言語技術のトレーニングの多くは、他者との関係を前提とし、相手意識をもって伝え合うことや、目的と場に応じて自分の考えを表現していくことなどから、コミュニケーション能力の育成に効果があると考える。

そして、子どもの「ことばの力」を高めるには、教師のレベルアップが不可欠である。教師自身が言語技術を意識し、教材研究を深めるとともに、わかりやすい発問や切り返し、説明するなどの指導技術も高めていきたい。

3. 本年度の活動

本年度は6回の研修会を実施した。研修会の内容は、主に言語技術の基礎を学ぶことと、各教科における言語技術を使った授業展開について考察していくことである。

また、高知新聞社や高知県NIEホッtrailいん、楽学会(図書館活用)の方々と連携し、研修会を行うこともできた。

研修のほとんどは、提案型の模擬授業形式で行った。提案者は、児童につけなけれ

ばならない基礎のことばの力は何なのかを明確にし、ねらいに沿った教材で模擬授業を行う。さらに、どの場面でどの言語技術を使えば、児童の思考が深まっていくのかを参加者全員で議論し合う。研修会は、参

加者全員の指導力を具体的な教材を使って鍛え合っていく場である。

また、若い先生方と経験豊富な先生方が実践交流をする場にもなっている。

本年度実施の研修会の内容は次の通り。

回	内 容
第1回	<p>「言語技術の基本と新しい教科書教材を使っの模擬授業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 問答ゲーム～論理的な受け答えをしよう～ ・ 描写～わかりやすく伝えよう～ ・ 絵の分析～事実に基づいて検討しよう～ ・ 再話～新教材を使った第一次の模擬授業～ ・ 説明～効果的にラベリングの技を使おう～ ・ 国語の新教材を使っの模擬授業 <p>～3,4年生の5,6月教材「物語文」「説明文」の授業を提案～</p>
第2回	<p>「新教科書教材研究」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「色をぬった部分の面積の求め方を考えましょう」 ～説明の仕方とは？算数（6年）教科書教材を使っ～ ・ 「みんなで新聞を作ろう」（東書「国語」4年上） ～4年生に必要な書く力とは？～ ・ はがき新聞を書こう ・ 教科書の改訂の趣旨について ～新教科書で子どもたちに学ばせたいこと～ ・ 「新聞の投書を読みくらべよう」（東書「国語」6年） ・ アクティブラーニングと国語科の言語活動
第3回	<p>「言語技術を授業に生かそう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言語技術の基本・絵の分析でウォーミングアップ！ ・ 「絵を見てお話を作ろう」 ～2年生に必要な書く力とは？～ ・ 4年説明文「くらしの中の和と洋」 ～引用、要約の力をつけるための言語活動～ ・ 朗読の指導法を学ぼう！ ・ 全国学力調査より授業を考えよう ・ N I E 全国大会（秋田県大会）の報告 ～N I E アドバイザー 川口加代子先生からのご報告～ ・ 6年教材「物語を作ろう」～写真から想像を広げて、物語を書こう～
第4回	<p>「言語技術の基本研修」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本①「問答ゲーム」～論理的な受け答えをしよう～ ・ 基本②「絵の分析1」～新聞の記事を使っ～ ・ 基本③「絵の分析2」～マークの分析～ ・ 基本④「視点を変える」～考える技術～ ・ 基本⑤「作文の基本」～自分の考えを組み立てよう～ ・ 基本⑥「物語を作る」～5W1Hを考えよう～ ・ 基本⑦「物語の構造分析」～読むための技術～ ・ 基本⑧「説明」～順序よくわかりやすく伝えよう～ ・ 単元を貫く言語活動をどう作り出すのか！！ ～「ごんぎつね」などの教材を使っ～
第5回	<p>言語技術教育研究会 講演会 「授業改善と言語活動～身につけたい力を明確にした国語科単元づくり～」 講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 水戸部修治氏</p>
第6回	<p>「探究的・協働的な学びを探ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「問答ゲーム」～論理的な受け答えをしよう～ ・ 実践発表 ・ 総合的な学習の時間について考えよう <p>～探究的・協働的な学習のための単元構想や学習指導について～</p>

4. 研修会より

(1) はがき新聞の活用研修について

研修会に参加した先生方に、はがき新聞が各教科・総合的な学習の時間等の教材として有効なものであることや、はがき新聞の書き方について学んでいただきと考え、研修の場を設けた。

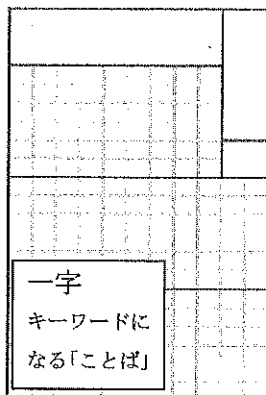
本研究会では、はがき新聞を書かせることで、子どもたちに付けたい力を、次のように考えている。

- ① 思考力
- ② 表現力
- ③ コミュニケーション力
- ④ 要約力

第2回の研修会では、「ことば」を意識し、新聞を活用したはがき新聞づくりを下記のように行った。

- ・ 新聞から1本の記事を選ぶ。
- ・ はがき新聞の題字部分に選んだ「記事の見出し」を書く。
- ・ なぜ、その記事を選んだのか、メッセージとして伝えることを意識して、10字前後のキャッチコピーをはがき新聞の見出し部分に書く。
- ・ 結論先行型で文章を書いていく。
(要点→理由→理由の具体化→例示→要点)

- ・ 記事を読んでキーワードとなる「ことば」を一字考え、イラスト代わりに、はがき新聞の中央に書く。
- ・ 書いた文章を推敲する。



教師自身が実際に書いて体験することで、子どもたちに付けたい力、①思考力 ②表現力 ③コミュニケーション力 ④要約力の中身が見えてくると同時に、指導の工夫点などをお互いに学び合うことができた。

来年度は、子どもたちの作品を持ち寄り、実践報告会を行いたいと考えている。



◆ 研修会・グループ交流の様子

(2) 実践発表

「ビブリオバトルをしよう」

安田町立安田小学校 安養寺淑恵教諭

テーマ：動物と人間の関わりをえがいた物語を読もう（第一次）
～「大造じいさんとがん」の自分の捉えた主題を紹介しよう～

ルール

- ① 発表者は「大造じいさんとがん」の主題と、それを支える理由や根拠を書いた文章（原稿用紙1枚程度）を用意する。
- ② 順番に一人3分で発表する。（語る）
 - ア. 発表する。
 - イ. 発表後、その発表に関するディスカッションを2分以内で行う。
 - ウ. 全員の発表が終了した後、主題が一番納得できたかを基準に投票を行い、最多得票を得た本をその班の「優秀主題」とする。

エ. 班の代表者によるビブリオバトルを行い、選ばれた主題が学級の「チャンプ主題」となる。

テーマ：動物と人間の関わりをえがいた物語を読もう（第二次）

ルール

- ① 動物と人間の関わりをえがいた物語を選び、第一次に準じた発表原稿を作る。
- ② 第一次と同じ流れ。ア～イ
ウ. 全員の発表が終了した後、感動したか、読みたくなかったかを基準に投票を行い最多得票を得た本をその班の「チャンプ本」とする。
エ. 班の代表者によるビブリオバトルを行い、選ばれた本が学級の「チャンプ本」となる。

ビブリオバトル第3弾

テーマ：冬休みの読書の中から、心に残った本を紹介しよう！

準備物：タイマー、各自の推薦本

ねらい：人を通して本を知る、本を通して人を知る。

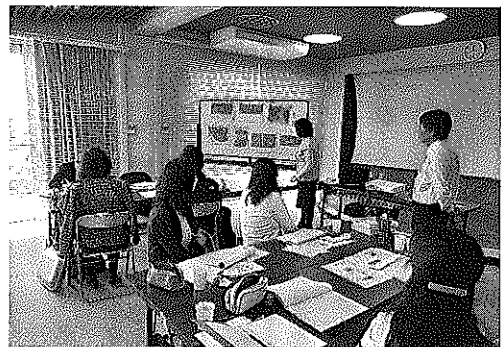
ルール

- ① 発表参加者は、読んで面白いと思った本を持って集まる。
- ② 順番に一人5分間で本を紹介する。
- ③ それぞれの発表の後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
- ④ 全ての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする。

とする。

<児童の感想>

- 自分の知らない本がいっぱいあって面白かった。
- ぼくは、ビブリオバトルをして、本を読む・聞く力と原稿用紙に文を書く力がつきました。
- ぼくは、ビブリオバトルをして、友だちの紹介でこんな本もあるんだ！と思ったので、またビブリオバトルをしたいと思いました。
- 私は、ビブリオバトルで筆者の言いたいことを読み抜くことができました。でも、覚えてつもりだったけれど、本番に言ってみたら覚えていなかったのもっときちんと覚えたいです。
- 難しかったけれど、文章のいいところを抜いていくことや面白い本を知ることができてよかった。
- わたしはビブリオバトルをして楽しかったです。ビブリオバトルの原稿には自分の感想なども書くので、想像も出来ると思います。動物と人が関わる本をたくさん知ることができたので良かったです。



◆ 研修会・グループ演習の様子

5. 成果と課題

- 言語技術スキルアップ研修会では、演習を通して、理由や根拠を明確にして受け答えをしたり、多くの情報から必要な情報を選択し、自分の考えを表現したり、多面的な見方をしたりするなど、教師自らのスキルを高める場となった。

国語科の「注文の多い料理店」の教材研究では、下記のようなシートを用いて、演習を行った。

「注文の多い料理店」演習シート

- 1 登場人物は何人でしょう。
(登場人物はだれでしょう?)
- 2 紳士の東京に帰っての2人の言動について考えて、紙上問答を行いましょ
う。(2人の紳士で答える。)

東京で仲間の紳士に聞かれました。
「この間の猟はどうだった?」

「ところで、その紙くずのような顔はど
うしたんだい?」

- 3 作者の思いを、紙上問答で考えま
しょう。
「なぜ、紳士を山猫に食べさせずに、紙く
ずのような顔で東京に帰したのですか。」

- 先生方がそれぞれの学校で実践した授業事例から、具体的な指導法を交流し学び合うことができた。
- 2月には実践交流会を行った。「言語技術をどの場面で、どのように活用すれば言語活動の充実を図ることができるのか」のテーマで、それぞれの実践内容、成果と課題を交流し合うことができた。
また、ベテランの先生方が若い先生方に助言する場面もあり、良い交流の場と

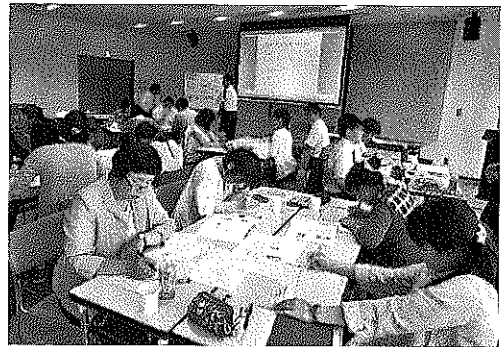
なった。何よりも、若い先生方が自分の実践をまとめ発信できる場は貴重な体験の場となったようだ。

- 今年度も、広島県で先進的な取り組みをされている先生方の実践から、開発した教材や指導の効果を高めるための様々な工夫等を学ぶことができた。

また、参加者一人一人が各校において、それらの実践事例を参考にして創意工夫した授業を行うこともできた。

このような県外の先生方との実践交流は、新しい情報を収集することができる場でもあった。

- 研修会には、高知県NIEほっとラインや楽学会(図書館活用)の先生方にもご参加いただき、情報提供をいただいたり、実践報告をいただいたりすることができた。新聞活用や図書館活用の授業づくりについても学び合う機会となった。



◆ 研修会・演習の様子

- 本研究会では、言語技術＝国語の学力と考えているのではない。しかし、国語の学力の中に技術的側面があることは確かなことである。

今後、そういった言語技術を体系的に整理し、国語の授業づくりに言語技術教育の観点を入れたシラバスを作成していきたいと考えている。

(代表：梶原和美)